

## 副学長 横川善正先生 推薦図書 推薦文 第1回 ～ 第2回

副学長 横川先生推薦図書 パート 1

読書という旅に出よう

—公立小松大学で学ぶ学生の皆さんに—

(パート 1)

「FACTFULNESS」(ファクトフルネス)

ハンス・ロスリング他著 日経BP社

「10の思い込みを乗り越え、データを基に、世界を正しく見る習慣」という副題がついているが、この本の題名をあえて日本語に訳するとすれば、「真実の一杯詰まった事実」あたりだろうか。何が本当のことであるかがよく分からなくなったとき、やはり立ち返るべきところは「ファクト」である。

著者のハンス・ロスリングは、スウェーデンの医師であり公衆衛生の専門家である。貧困、環境、医療、人口など、今日の世界が抱えるグローバルな課題が、とにかく悲観的な視点から捉えられ、いきおい人類と地球の終末論と結びつきがちとなる昨今。しかも、研究者は現状肯定よりも現状批判、加えてベシミスティックな知見のほうがより深く真実を捉えているかのような印象を与えると、著者は述べる。具体的な10の思い込みの事例について、3択の質問形式でもって、ファクトを突きつける。つぎつぎと真実が暴かれ、そのたびに読者は怒りと無念さのやり場に困るというオチがつくのが愉快でもある。

第4章は恐怖本能について、「危険でないことを、恐ろしいと考えてしまう思い込み」の例を、不安神経症に怯える現代市民にぶつける。恐れることは、ホモサピエンスが生き延びるための武器であったが、どうじにこれを手放さなければ、生命力までも否定してしまいかねないネガティブな心性でもある。

「正しく恐れる」ためには、まず、常識とされてきたことを疑ってみなければならない。「思い込み」は知性の硬化であり、それが妄信や迷信となれば人間の生命力を枯らしてゆく。本当の知性とは、悲しみを生きる力に変えるのである。

スウェーデン人固有の合理主義とプラグマティズムをもって、主知主義を謳う著者は、健全な「ベシミスト」としてのデカルト、そしてよく生きるための哲学者スピノザの衣鉢を継ぐものである。

副学長 横川先生推薦図書 パート 2

読書という旅に出よう

ー公立小松大学で学ぶ学生の皆さんにー

(パート 2)

『病気を描くシェークスピア ーエリザベス朝における医療と生活ー』

堀田 饒 著 (集英社 2016 年出版)

ウィリアム・シェイクスピア (William Shakespeare, 1564-1616) といえば、英国を代表する劇作家であり、今日も世界中のどこかの劇場で演劇はむろん映画やミュージカルなどで観られ、毎日どこかの新聞や雑誌のコラムに登場する、永遠のアーティストである。「幾万のこころを持つ」といわれるシェークスピアの描く人間模様や世界観が、「自然に鏡を掲げるように」(『ハムレット』3 幕 2 場) 映し出され、機知とユーモアに富む、自在で謎めいた台詞は世界中の言語に訳され、愛されてきた。

著者の堀田 饒氏は現役の糖尿病の専門医である。シェークスピアの作品が坪内逍遙によって我が国に紹介されて約百三十年になるが、これまでに「病と医療」をテーマとした「沙翁論」(日本ではシェークスピアを<沙(さ)翁(おう)>と呼ぶ)は、すくなくとも国内では本書以外にはみあたらない。巻末カラー口絵では「切手にみるシェークスピアとその作品」を収録しており、本著は「医者之余技」の域をはるかに超えた審美眼の透徹した医療文学論をなしている。

また、37 編の原文はいうに及ばず、坪内逍遙訳の他に、同氏が学生時代に読まれた福田恆存訳、同世代の小田島雄志などの訳(ソネット集からの引用)、そのいずれをも熟読した堀田氏は、「近代医学以前の民間伝承の医療を醸し出すのには、現代日本語への過渡期の坪内逍遙の表現がもっとも相応しいと考えた」と序文に書いている。中世から近代への転換期を生きたシェークスピアの台詞の重みを伝えてくれるのは、やはり古色蒼然としたなかに独特の妙味をのこす逍遙訳なのである。

当時は、西洋医学の祖であるヒポクラテスやガレノス以来の古代ギリシャ・ローマ医学の伝統が受け継がれていたとはいえ、以下のような、王様による「ローヤルタッチ」や占星術、中世の体液病因説やハーブなどによる民間療法の影響が依然として大きかった。

「陛下がお手に触れさせられれば・・・彼らは直ぐ回復いたします。」(『マクベス』第 4 幕第 3 場)

また、聖職者が医者を兼ねるといった具合に医業の未分化の状態が続いていたものの、内科医と外科医の診る疾病の区別や診療行為の専門化が始まり、ようやく近代医療の兆しが見え出したところである。

当時の主な感染症としては、ペスト、梅毒、コレラ、マラリア、ハンセン病などがあげられるが、いうまでもなく最も恐れられた病気 (plague) はペストである。シェークスピアが30歳を迎えようとしていた1592年の8月から1594年の春にいたる期間は、今日のコロナ禍をはるかに上回る死者を出した黒死病 (ペスト) が猖獗(しょうけつ)を極めていた。死亡率が60－70パーセントと、一旦感染すればほぼ致命的とされ、ロンドンでも市民の十分の一にあたる一万五千人が亡くなった。

シェークスピア自身は雇われていたが、経営するロンドンの劇場は封鎖となり地方巡業を余儀なくされたため、一時は詩人に転向する決心さえしている。1601年に出版された詩集『ソネット集』には、愛を捧げた恋人 (パトロン) のすがたは金髪の白人ではなく、正体不明の「ダーク・レディ」として登場する。黒く変色した遺体の概観からペストが black death (黒死病) と呼ばれたように、「黒い貴婦人」は「メメント・モリ」(死を忘れるな) と深くむすびついていたと思われる。

本著ではまた、当時の医者が、聖職者や貴族社会と深くかかわり、表に出てこない政治や宗教にかんする裏情報につうじ、いかに政変の要を密かに握っていたかも窺える。医者は芝居のなかではわき役であるが、シェークスピアの手にかかればその悪行は見事に暴かれる。「医者なんか信じるな、やつの解毒剤は毒だぞ。やつは汝ら以上の人殺しだ」。(『アテネのタイモン』第4幕第3場)

こうした文学的な素養と趣味の豊かな内科医の診断を受けた患者は、さぞかしユーモアと慈愛に励まされ、心から癒されるのではなかろうか。これからの医療現場に求められるのは、劇作家シェークスピアが体現していた本当の意味での「ソーシャル・ディスタンス」の妙味、つまり人間性あふれる自在な人の「間合い」であったにちがいない。

さいごに、良医である著者がたどりついた諦念を明かそう。

「医業は只一時、命を延ばすだけのもので、医者みずからも死は免れない。」(『シンベリー』第5幕第5場)